

自然科学者のみた地域 研究の世界 山田 勇

- ①A. R. Wallace (1869; 1983) *The Malay Archipelago*, MacMillan & Co., U. K. 1983, reprint. Graham Brash, Ltd., Singapore.
- ②I. H. Burkill, (1935) *A Dictionary of the Economic Products of Malay Peninsula: Crown Agents for the Colonies*, Vol. I, II.
- ③中尾佐助『秘境ブータン』(1971) 社会思想社。
- ④今西錦司 (2002)『生物の世界ほか』中央公論新社。
- ⑤P. W. Richards (1952) *The Tropical Rain Forests*, Cambridge University Press.

地域研究というからには、ある「地域」の名が入っていることが条件である、というようなことはいいたくない。むしろ、表には地域がどこか明確に示されず、内に豊かな地域研究色がでている良書も少なくない。ここでは、ある地域に足を踏み入れた時に、現実役に立つというか、そこにもられた情報や著者の意図が、その地域を理解する上で、きわめてユニークであり、他の追従を許さない、と私がおもっている著作と共に、より広い視野から地域研究を遂行するにあたり、基本となるとおもわれる著作をいくつかあげてみたい。

ウォーレスのこの本は、知る人ぞ知る東南アジア地域研究の古典中の古典である。ウォーレスは、ダーウインに先がけて進化論を提唱した生物学者として広く知られるが、この本は、かれが現在の島嶼部東南アジアを調査した時の記録である。地域はシンガポールにはじまり、ボルネオ、ジャワ、スマトラからバリ、ロンボク、チモール、セレベス、アンボン、テルナテ、バチヤン、セラム、アルをへてニューギニアまでの広い範囲を含んでいる。著者の目は単に生物学者の自然観察だけでなく、地域の人々の生活を中心とした風土の詳細な観察にまで及んでいる。生物学者の紀行には、部外者が読むとおもしろくないものも少なくないが、この本は、当時の広義のマレーシア地域を克明に描写したすぐれた著作である。

この地域は世界でも有数の豊かな生物多様性と、豊か

な人々の生活が息づくところであり、随所にウォーレスの鋭い観察が光をはなっている。自然科学者でなくとも、むしろ自然観察にうとい人文社会系を指す人がまず読むべき基本書である。

次のバーキルの本は、二冊に及ぶ大著であり、マレー半島の生物資源についての詳細なモノグラフである。この出版からすでに長い年月がたっているが、その後の同系統の出版物は、ほとんどこの著作をもとにしたものである。これ以前にインドネシアではハイネの有用植物の本があるが、それほど一般的にならなかった。この本によって、東南アジアの生物資源の豊かさが確固たる地位を築いたといっている。イギリス人の、しぶとい、克明な文献調査と、現地での長い体験が合和して、大著作ができあがっている。文献学者はフィールドに弱く、フィールド派は文献に弱いという通説を覆す、すぐれた文献である。

中尾佐助の『秘境ブータン』（初版は毎日新聞社、一九五九年）は、当時入国の難しかったブータンへ六ヵ月間入った時の記録である。京都へやってきた王妃との面会にはじまり、渡航までの資金集め、準備のうちに、インドをへてブータンへ入り、各地を旅行して、ブータンの当時の状況を詳しく伝えている。また文献による歴史的な記述も大変すぐれていて、ブータンという国を知るのに、これ以上の文献はいまだにでない。私は二〇

リーディング・ガイド●

○四年の一〇月から一月にかけて三度目のブータン入りをし、テントのなかでこの著作を読んだが、まさに自分の歩いている場の描写が、まるで今日の状況と同じように新鮮であった。もう五〇年近く前の著作になるため、表現方法に問題のあるところもあるが、一国を扱った地域研究書として、じつにすぐれた著作である。自然科学者のもつ自然環境へのするどい観察眼によって、地域の諸現象がスッキリとわかりやすく書かれている。私は、自然科学者の著作だけでなく、人文社会系の著作も多くの目にしているが、それらの多くは、論のみ多くして、切味の良さという点で、自然科学者に劣るものが多い。その原因の一つは、自然科学が、できるだけ単純化することで骨格のみを示すのに対し、人文社会学の多くは贅肉をつけすぎるためであろう。知っていることすべてを書きならべたり、むやみと他人の学説をひっぱりだして、本人の意見がまったくないような著作が多すぎるのである。

若い時代、私はフィールドへいく時に今西錦司の『生物の世界』（初版は弘文堂書房、一九四一年）を常に持っていた。現場で、迷う時、決断がつかない時など、この本を読んで、気をとり直し、またフィールドに向かった。今西錦司は、日本のフィールドサイエンスの草分けである。かれの著作は、今や著作集になっていて、初期のものから、晩年のものまで、そろって読むことができ

る。晩年のものは、いかにも今西錦司という味がでていて、それはそれでいいが、フィールド派を目指す人には、やはりこの本が、『生物社会の論理』（平凡社ライブラリー、一九九四年。初版は陸水社、一九四九年）がいいと思う。じつにスツキリと、明析に、かつ味のある短い文章で、生物の世界の重要性、おもしろさ、ユニークな自説を述べている。この著作は、戦争にいく前の遺書として書かれたとあるが、死を覚悟した人間のいさぎよさが、美的な文章となつてあらわれている。今西錦司ほどの人物になると、さまざまな人々が多くを語っているが、その原点としてのこの本を読むことによって、かれの本質が理解でき、しかも、そこにのべてある論証は、現在のフィールドワークの原点ともなりうる力をいまだにもっている。

最後にあげたいのは、リチャーズの『熱帯多雨林』である。この本は熱帯雨林を対象にした最初の本であり、熱帯多雨林研究の原点ともいふべき著作である。この本を読んで、私は、今西錦司の本と同じ明快さとすぐれた論理性を感じた。この本のあとにT・C・ウィットモア(Whitmore)の *Tropical Rain Forests of the Far East* (Oxford: Clarendon Press, (975) がでて、内容量の豊富さでは充実しているが、基本的な熱帯雨林の取り上げ方としては、やはりリチャーズがすぐれている。ここでの特長は東南アジア、アフリカ、それにアマゾン

●リーディング・ガイド

の熱帯雨林の比較地域研究をおこなっていることである。一九五〇年代という時代に自分の調査を通して、三地域の比較研究をおこなったということは画期的なことである。地域間比較というのは、地域研究の最後の段階として、必須のものであり、これなくして地域研究は完成したとはいえないと私は考えている。そういう点では、高谷好一の『世界単位』から世界を見る——地域研究の視座』（京都大学学術出版会、一九九六年）は、最近のもっとも大きな成果である。これだけ世界が短い距離で結ばれる時代に、なぜ、ウォーレスやリチャーズのような仕事がでてこないのか。その一つの原因は、じっくりと長期間にわたって調査をする余裕がなくなつたためであろう。昔にくらべると、数百倍のスピードで世の中が動いている。そして知らぬ間に、そのスピードにのることを見失ひ、忙しさにかまけて、お茶をにごしているためであろう。今、東京を中心として、続々と建築されるビル群のどれ一つとして、一〇〇年後に生きつづける価値のあるものはない。ここにあげた著作は、すでに半世紀以上生きつづけてなお、価値の高いものばかりである。最近の本は、これにくらべて、あまりに軽く、単層的である。地域研究は、フィールド調査にもとづく、ある地域の特色を示す詳細なデータとともに、地球上での比較地域研究までもつていかなければ完成しない。その意味で、現在の地域研究書の多くは、まだ片手落ちである。

ここにあげたものは、すべてが自然科学者によるものである。これら以外でも、日本の地域研究には自然科学者による好著が多い。地域研究を目指す若い世代は、ぜひ若い時代にこういった先端性の高い研究にふれてほしい。なぜなら、最近接する若い人の論文や著作には、歴史的な背景への配慮が不足しているからである。

学問はどんな分野でも、營々たる日々の努力の積み重ねであり、とりわけ、地域研究は単なる一つや二つのデイスプリンの仕事ではない。地域の重みは、そう簡単に書けるものではない。常に古典にかえることによつて、地域研究への姿勢を考え直すことが必要な時代にくている。

(やまだいさむ／京都大学東南アジア研究所)

リーディング・ガイド●